主鏡直径一気に30メートル前後

欧米で次世代巨大望遠鏡計画

米国のTMT、欧州のE-ELTの計画が、欧米の観測者による30メートル級の巨大望遠鏡の開発を進める。日本は、次世代の観測は、30メートル級の観測が不可欠であると認識している。

- TMT（米国）
  - 主鏡の直径: 30m
  - 作成: 482枚の小型鏡, 16枚の大型鏡
  - 設計費用: 約96億円
  - 完成予定: 2015年

- E-ELT（欧州）
  - 主鏡の直径: 42m
  - 作成: 840枚の小型鏡
  - 設計費用: 約100億円
  - 完成予定: 2017年


国立天文台のすばるは400億円を投じて建設され、89年から観測を開始している。世界で50台目の次世代巨大望遠鏡が稼働している。望遠鏡の運用を続けるため、数値処理を進める。

そのため、次世代望遠鏡の開発を後押しする。すばるの能力向上研究が進められている。次世代望遠鏡の望遠相手として、すばるの観測を高めるうえができた。

すばるは、世界一の大きさを持つ新世代の望遠鏡である。すばるは、大きな視野と高感度、高解像度を兼ね備えている。すばるは、超新星、黒洞、暗黒物質の研究に寄与している。

日本で行なわれる望遠鏡開発は、次世代の観測にとっては不可欠である。次世代望遠鏡計画は、日本独自の研究者が行っている。日本で行なわれる望遠鏡開発は、次世代の観測にとっては不可欠である。次世代望遠鏡計画は、日本独自の研究者が行っている。